

HRE032-02

会場:203

時間:5月22日 16:45-17:00

焼畑の持続性とは？ エチオピア西南部森林地域の事例から What is sustainability of swidden agriculture?

佐藤 廉也^{1*}

Ren'ya Sato^{1*}

¹九州大学

¹Kyushu University

1 はじめに

この報告では、エチオピア西南部の森林において焼畑を主な生業として生活する人々（マジャンギル）の森林資源利用・管理について、時系列に沿って森林利用の変化を見ながら、持続的森林資源利用・管理が成功あるいは失敗する条件について検討する。

報告者は、森林内を頻繁に移住しつつ焼畑を行うマジャンギルの人々について、およそ100年にわたる集落移動と焼畑の立地の変遷を復原し、社会経済変化に伴って立地要因がどのように変化し、森林にいかに関与するかを分析してきた。したがってこの報告では、それらのデータを基礎として、集落・焼畑立地の変化とその森林に与える影響、そして変化を促す社会経済的要因についての検討を中心におこなう。さらに、異なった背景をもつ周辺の小規模社会における資源管理をめぐる問題についても比較検討したい。

2 マジャンギルの焼畑・集落立地の変容

1970年代までのマジャンギルは、森林内を頻繁に移動しつつ、数十人程度の小規模な集落を形成し、集落の周辺で焼畑をおこなっていた。集落および焼畑は森林内に広く分散しているものの、100年のスパンで変遷を見ると、主に水場の存在を制限要因として限られた場所に循環的に立地していたことがわかる。この焼畑・集落立地は1980年代以降、エチオピア政府から実質的に独立した状態にあったマジャンギルが初めて政府の傘の下に入ることによって大きく変容し、さらに政府の定住化政策によって限られた場所に大規模な村落を形成し、休閑期間を短縮化して焼畑をおこなうようになった。定住化に伴って村落中心部付近の焼畑地が不足し、結果として休閑が短縮化する一方で、焼畑・集落の森林内に占める面積自体は顕著な変化はなかった。労働生産性を最も重視する焼畑という生業をおこなう人々にとって、定住村落から離れた場所に焼畑を伐採することよりも、休閑を短期化しても住居から近接した場所に焼畑を開くことが優先されたということができる。

このような変化が定着した2000年以降に対象地域の人々が直面する問題として、(1)外国資本によるアブラヤシ農園開発(2)移民問題(3)現金経済の急速な浸透、などがあり、これらが今後森林に与えるインパクトは大きいと予想され、人々の対応が注目される。

3 持続的な森林資源利用の条件

マジャンギルの焼畑は、定住化によって変容する前後の時期を通じて持続的であったと評価できる。ただし、これはマジャンギルの人々が持続的資源管理のための努力を意識的におこなったというよりは、森林のキャパシティの大きさや、環境へのインパクトが限定されている焼畑という生業そのものの特質によるものと思われる。マジャンギル自身が森林の脆弱性を認識しつつ意識的に持続的な利用をおこなってきたわけではなく、彼らの行動原理自体は労働生産性を最大化することにあるように見える。森林劣化が抑制されてきた他の要因としては、(1)森林域の利用権における緩やかなメンバーシップの存在(2)森林産物の市場化のためのインフラの不在・不備(3)エスニック・アイデンティティに関連する焼畑民マジャンギルの森林の占有意識の強さ、などを指摘することができる。とりわけ、近年外国資本によって計画されたアブラヤシ農園開発に対して、現時点でマジャンギルが行政区内の自治権を盾にとって反対を貫くことができているのは、(1)や(3)の要因によるところが大きい。報告ではこれらの経緯を報告するとともに、対照的に大規模開発プロジェクトによって危機に瀕する周辺社会の事例なども紹介しつつ、それらの条件の違いについても検討したい。

キーワード: 焼畑, 持続的森林資源利用, 共有資源, 民族間関係, エチオピア

Keywords: swidden agriculture, sustainable forest resource use, commons, ethnic relations, Ethiopia